



委員会等活動成果

国際関係委員会 外国文献研究会

豪アクチュアリー会の月刊誌 "Actuary" 第 141 号(2009 年 7 月) 4 ページ
"Looking Back... On the Future" Matthew Wood より

2010 年 2 月 26 日

原文の入手方法

IAAust Publications Home Page

から Publications&Research→Library→Actuary Australia を選択し、 Actuary Australia 2009 (July - Issue 141)をクリック。

2049 年にオーストラリアのアクチュアリーが自分の人生を振り返るものです。

未来を振り返る——生命保険会社は失敗から学んだか

時は 2049 年。マービン、ATM 生命保険会社のチーフ・アクチュアリーとしての最後の朝を迎えた。ATM 生命はオーストラリアの 3 つの巨大生命保険会社が合併し 2035 年にできた会社だ。今日がたまたまマービンの 75 歳の誕生日だったとしても驚くことはない。オーストラリア政府は、長年、国民の長寿化の問題に取り組んできたものの解決策がなく、年金の受給権獲得年齢を引き上げた。今ではすべてのホワイトカラーが自己負担の積立年金を受給するには 75 歳まで働かなければならないのだ。

マービンは PC を立ち上げ、日次決算プログラムを流してにんまりする。モデルポイント・プログラムを走らせながら、自分の 50 年の会社人生を振り返る。プログラムがメインフレームからデータを吐き出し始めると、マービン自身も悪態を吐き始めた。もう 40 年も昔のものなのに、会社はシステムをアップグレードしようとして、わんさかある年代ものの商品がヒーヒー言っているのに知らん顔だ。彼が生命保険業界にいる間に商品開発の波が相次いで押し寄せ、3 つの異なる有配当ブロックが 10 年単位で出来上がり、いつまでも悩みの種だ。

マービンは 2008 年から 2013 年まで続いた金融危機に思いをはせる。深刻な世界不況を引き起こし、その影響は数十年後の今日でも消えていない。米国は、銀行が不良資産の売却に消極的であったため不況が他国より長引き、おまけに財政赤字は相次ぐ経済支援策で火だるまの状況に。うなぎのぼりの公的医療費は抑えきれず、税率を引き上げる勇気もなかった。結局、2023 年、米国は G20 の座を追われ、世界経済では中国の役割が確たるものとなった。

オーストラリアはどうかというと、失業率は2013年に15%を超過した。GDPは2011年にマイナス3%を記録。このため株式市場は引き続き混乱し、ASX200は指数1,000を切るまでになった。回復基調に戻ったのは10年ほど経ってからだ。

信用危機を受け、世界中の規制が大幅に強化された。2015年には国際的な機構として「重要金融グループ監督機構 (Body for the Oversight of Systemically Significant Institutions; BOSSI)」が設立された。

不幸にも、生命保険会社は今世紀初頭の失敗を教訓として活かせなかった。政府もまた、システム・リスクに気をとられ、モラル・ハザードに注意を向けてこなかった。このため、2026年、世界最大の銀行が、何兆ドルもの不良資産の負担に耐えかねて破綻した。後にGFC2と呼ばれる世界恐慌に突入したのだ。指数20,000の高値であったASX200は、真逆さまに下落し、2027年中ごろには6,000に逆戻りした。何百万という人のスーパー年金の資産が消滅した。

この時期、生命保険業界の動向もにぎやかだった。2013年に募集手数料が廃止された。2011年に業界を震撼させた不法販売スキャンダルの影響だ。いくつもの生命保険会社が業廃を強いられる。ATM生命は手数料制度を取り止め、アドバイス料ベースの顧問セールスに専念した。当初いろいろ問題はあったものの、「正しいアドバイスを受けよう」キャンペーンが功を奏し、2年も経つと世界中から手数料というものがなくなった。

2015年にはATM生命もついに重い腰を上げ、いくつもの組み込み保証のある変額年金を開発した。マービンには長い時間を費やし、おまけに会社の巨大な資金も費やし、これらの保証をカバーする複雑なヘッジ・プログラムを開発した。多くの競合会社も追随し、市場で最も評判の良い商品となった。そこにGFC2の打撃だ。ヘッジ・プログラムは機能せず、多くの会社が赤字となった。金融市場のボラティリティーが急上昇したのだ。時を経ず、変額年金の業績はがた落ちし、オーストラリアにおける「試しに売ってみたが失敗に終わった商品」リストの末席を賑わすことになった。ただただ、オーストラリアの生命保険会社が、海外の経験から学んでさえいれば、と悔やまれるばかりだ。

2040年代に何度も顕在化したオペレーション・リスクのおかげで、ATM生命のリスク・チームは国内最大の組織となった。総勢150名、内アクチュアリー50名という組織だ。

この50年間でアクチュアリー会は大きく変わった。何十年もかけ、あらゆる分野のリスク管理の専門家であることを売り込んだ。2019年にはアクチュアリーは、オーストラリア中の企業で重要な地位を占めるにいたる。今日ではあらゆる企業は任命リスク・アクチュアリーを置かねばならない。その任務は、企業があらゆるリスクを洗い出し、管理している旨を認証することだ。今から思えば、これで本当によかったのか、マービンには確信がない。というのは、2030年、企業監督局はGFC2の影響を見通せなかったアクチュアリーに膨大な罰金を課したのだ。

2030年代の後半には、生命保険の付保不足の問題はほぼ解消した。アクチュアリー会が中心となり、国民に対して適切な金額の保険に加入しようという運動を行った。これが大きな効果をあげたのだ。いくつかの衝撃的な広告もあった。家族の大黒柱が死亡すれば、家族に経済的、情緒的な負担がかかることがある、などといって恐怖をあおったのだ。商品は改定され、更新型定期保険は保険料率確定型定期保険に取って代わられた。ATM生命もこの分野に進出した。定期的な調査によれば、今ではオーストラリア国民の95%以上は、十分な生命保障を得ているという。

アクチュアリー教育は、今日では、真に国際的なものとなり、リスク管理とコミュニケーション技術が中心となった。実際、大学における1年間の集中講座は、コミュニケーション技術の開発に当てられ、今では必須のものである。アクチュアリーと呼ばれたいなら必ず受講しなければならない。あとは「総合リスク管理 (Complete Risk Management; CRM)」に関する講座を受講すれば、訓練はだいたい終わりだ。

アクチュアリーは地球温暖化の議論に積極的に取り組み、長年、この分野で実績を上げた。しかし2019年ごろ、科学者の理解が違っており、地球は実際には少々寒冷化していたことが明らかになると、この問題に関与してきたと称するアクチュアリーは、ほとんどいなくなった。

2033年から2034年にかけて派生したウシ・インフルエンザのパンデミックで、人類の4分の1が死亡した。何度も周期があり、そのたびに被害がひどくなった。90%の生命保険会社と、再保険会社にあっては1社を除いてすべてが、この巨大負担を生き抜いた。ありがたいことに、監督局はソルベンシー規制を強化していて、パンデミックを想定した多大のマーヅンを求めている。もしこれがなかったら保険会社は1社も生き残らなかっただろう。ATM生命もまた、この慎重なリスク管理政策のおかげで幸運にも生き残った会社のひとつになったのだ。

5時間後、本日の決算結果が出てくるところ、マービンの回想は現在に戻る。出力帳票を眺めてマービンは思う。俺もこの証券番号63111798の契約者になりたいものだ。ATM生命の伝統的有配当(フェーズ2)商品の最後の契約者だ。この20年間、保険契約者へ割り振るべき収益を低く見積もりすぎてきたため、この保険契約者に5億ドルもの配当財源が割り当てられることになった。死亡保障額は50万ドルでしかない。ATM生命はBOSSIと交渉して、この配当財源を株主に返還しようとしたが、要望は最終的に却下された。

ありがたいことに、オーストラリアの市場には年金商品が再登場している。マービンはインデックス連動型終身年金を200万ドルの退職資金で購入できることになっている。長い老後を健康に生きることを楽しみにしている。少なくとも120歳まで生きるつもりだ。2020年代に大きな進歩を遂げた遺伝子医療に感謝したい。



Actuary Australia (July 2009 Issue 141) page 4

By Matthew Wood

http://www.actuaries.asn.au/IAA/upload/public/AA_JUL09-WEB.pdf